

聖書ヘブライ語における 同語反復的不定詞絶対形 —否定詞の現れ方から見た語順—*

竹内 茂夫[†]

キーワード： 聖書ヘブライ語、同語反復的不定詞絶対形、否定詞、語順、
朗唱記号

1 はじめに

本稿の目的は、聖書ヘブライ語において定動詞に先行して現れる同語反復的不定詞絶対形（略語として InfAbs）の構文に、否定詞がどのように現れるかを考察することによって不定詞絶対形の統語上の位置を検討し、「例外」と見なされてこれまで説明されていなかった用例に対する説明を試みるものである。

聖書ヘブライ語において¹、定動詞に同語反復的不定詞が先行する構文は数多く見られる (Solá-Solé 1961:96 によると 447 例)。

(1) môt tāmût (創世記 2:17)

die(InfAbs) you die

「あなたは必ず死ぬ。」(邦訳は、特記以外新改訳第3版)

この種の構文は、簡略化して示すと次のように統語分析されている。

*本稿は、平成 20 年度西アジア言語研究会 (2008 年 12 月 6 日、京都産業大学) における研究発表に加筆修正したものである。また、科学研究費補助金基盤研究 (C) の研究課題「前 2-1 千年紀における北西セム語の等語線の再画定：GIS による言語地理学的研究」(研究代表者：池田潤)(平成 18~21 年度)の一部を成すものである。

[†]京都産業大学文化学部

¹聖書ヘブライ語以外の北西セム語の用例については、竹内 (2007) を参照。

(2) a. [[môt tāmût] ...]

b. [môt] [[tāmût] ...]

このうち、(2a) のように動詞句の構成要素の一部として分析するのは、“internal object,” “internal accusative” といった名称で呼ぶことによってなされているものと思われ、伝統的な立場としてよく見られる (例えば Jouïon and Muraoka 2006:391-92/§123d および 391fn4)²。

一方で、この構文を (2b) のように動詞句の構成要素の一部として捉えずに、不定詞絶対形を除く部分から「外置された」(Goldenberg 1971)、「独立した」(Waltke and O'Connor 1990:584/§35.3.1a) あるいは「等置の」(Meyer 1992:405) 要素として見なす立場がある³。

この構文に否定詞が現れる時に、不定詞絶対形の前後どちらかに現れうる。本稿では否定詞の現れる用例を観察し、ヘブライ語聖書本文に付されている朗唱記号の現れ方をも見ながら、同語反復的不定詞絶対形の統語的な位置を見直す手がかりとしたい。

2 否定詞を伴う例証

定動詞に同語反復的不定詞絶対形が先行する構文に否定詞 *lō*(') または *'al* が現れる例は 35 例を数えることができる⁴。これらを否定詞の現れる位置から分類すると、

1. 否定詞が不定詞絶対形に後続する、すなわち不定詞絶対形＋否定詞＋定動詞のような例：29 例
2. 否定詞が不定詞絶対形に先行する、すなわち否定詞＋不定詞絶対形＋定動詞のような例：6 例

² 同族目的語 (cognate object) と似ているとする見解もあるが (例えば Waltke and O'Connor 1990:167/§10.2.1g)、統語的な振る舞いは似ていない。この点については稿を改めて論じたい。

³ Davidson and Gibson (1994:123/§101) では “as a special kind of subject compl.” と記すことによって、このように分析しているようである。

⁴ 否定詞を含む用例は、竹内 (2007) で論じた場合とは異なり、聖書ヘブライ語以外の北西セム諸語には見られないようである。死海文書 4Q163/4QpIsa^c/Isaiah Peshet 3 [すなわちイザヤ書 8-32 章からのいくつかの本文の注解] f23ii:15 に *bkw lw' tbkh* 「もうあなたは泣くことはない」という例が 1 例見られるけれども、イザヤ書 30:19 の本文からの引用である。

に分けられる。このうち、数が多く「規則的」「通常」「典型的」と言われる 1 の用例から検討していきたい。

その際、ヘブライ語聖書本文に付されている朗唱記号 (cantillation mark) の現れ方をもあわせて参照しておきたい。現在広く使われているヘブライ語聖書すなわち *Biblia Hebraica Stuttgartensia* (略称 *BHS*) におけるヘブライ語本文には、子音字および母音記号の他に、アクセント記号または朗唱記号と呼ばれる記号が付されている。このアクセント記号は 2 種類に分けられ、18 個の分離 (disjunctive) (以下、分離記号) と 9 個の接続 (conjunctive) (以下、接続記号) の 2 種類があり (詩篇、箴言、ヨブ記は少し数が減り、12 個の分離記号と 9 個の接続記号)、朗唱の際の節や句の切れあるいはまとまり (さらには抑揚) を示しているとされる。ここでは、*BHS* に付属の表に従って 1~18 が分離記号 (詩篇、箴言、ヨブ記においては 1~12)、19~27 が接続記号 (同じく 13~21) を表すものとする。朗唱記号は [] で表示し、詩篇、箴言、ヨブ記の引用においては番号が異なってもそれ以外の巻と同じ記号であることを示すために [4=7] のように [詩篇、箴言、ヨブ記の番号=それ以外の巻の番号] のように示す。分離については数字の小さい記号が概してより大きな切れを表している (例えば、[1] は節の終わりの、[2] は節を大まかに 2 つに分ける語のアクセントのある音節の下に付される)。

以下の例文において、各ヘブライ語の語末に [8] のように角括弧に入れて朗唱記号の番号を付す。番号がなくハイフン [-] になっている場合は、ヘブライ語本文において次の語とマッケーフと呼ばれる連結記号でつながれて、マッケーフに後続する語にのみ 1 つの語アクセントが落ちて朗唱記号が付される一方で、先行する語には朗唱記号が付されていないことを示す。

2.1 不定詞絶対形+否定詞+定動詞：29 例

上述のように、35 例中 29 例においては、否定詞が同語反復的不定詞絶対形と定動詞の間に現れ、従って (3) のように [不定詞絶対形+否定詞+定動詞] という語順を取る (本章と次章に挙げた 2 例以外の 27 例については、巻末に記す)。

なお、同語反復的不定詞絶対形とそれに後続する定動詞の間には、否

定詞以外は現れない。同語反復的不定詞絶対形の前には、例(3)のように *wə* 「そして」という接続詞の他には、*raq* 「ただ」、*gam* 「また、～も」といった不変化詞のみが現れる (InfAbs = 不定詞絶対形、NEG = 否定詞)。

(3) *wə-hāmēt* [8] *lō(')* [19] *nəmîte-kā* (士師記 15:13)

&-kill(InfAbs) NEG we kill-you

「私たちは決してあなたを殺さない。」

この語順については、“The regular place of the negative” (Gesenius, Kautzsch and Cowley 1910:344/§113v)、“usually before a finite verb” (Joüion and Muraoka 2006: 396/§123 o)、“the typical word order” (Williams 2007:85/§205) のように言われている。同語反復的不定詞絶対形について詳しく論じた Goldenberg 1971 はさらに、この構文での不定詞絶対形について “[it] may well be considered to present as an extraposed ‘logical subject’ ” と述べ、(3) を “but (as to) killing — we will not kill you” と訳している (Goldenberg 1971:66/§28)。

用例の数の多さから相対的に判断して、この語順が “regular,” “usually,” “typical” であるという意見にここでは従っておく。

朗唱記号から見ると、例えば上述の(3)においては、同語反復的不定詞絶対形に分離記号 [8] が、否定詞に接続記号 [19] が付されており、不定詞絶対形が別のまとまりとして読まれていることがわかる。

また、不定詞絶対形を除くとその他は通常の否定文なので、定動詞に先行して同語反復的不定詞絶対形が現れる構文において否定詞が現れる場合、不定詞絶対形が外置されているとして次のように捉えることができるであろう。

(4) [InfAbs] [NEG V ...]

2.2 否定詞＋不定詞絶対形＋定動詞：6例

一方で、否定詞が不定詞絶対形の前に現れる例が6例見られる。これらの例については従来ほとんど説明がなく、仮に記述があったとしても “also occurs” (Williams 2007:85/§205) のように説明になっていないと思われる。

まず、これらの6例は大きく2つに分けることができよう。1つのグループは否定疑問または修辞疑問とも言うべき構文で (Goldenberg 1971:68/§30)、

後接辞的な疑問詞 *hă-*「～か?」が否定詞 *lō(')* に接頭し、それに後続して不定詞絶対形と定動詞が現れる構文で、3 例を数えることができる。

2.2.1 否定疑問：3 例

(5) *hă-lō(')* [12] *hānōp* [24] *teḥēnap hā-'āreṣ ha-hī(')* (エレミヤ書 3:1)
 INTER-NEG pollute(InfAbs) it pollute the-land the-that
 「この国も大いに汚れていないだろうか。」

(6) *hă-lō(')* [8] *hāmēt* [19] *tāmītē-nī* (エレミヤ書 38:15)
 INTER-NEG kill(InfAbs) you kill-me
 「あなたは必ず、私を殺すではありませんか。」

(7) *hă-lō(')* [25] *sālōḥ* [24] *sālaḥtī* [20] *'ēley-kā* (民数記 22:37)
 INTER-NEG send(InfAbs) I sent to-you
 「わざわざ使いを (あなたに) 送ったではありませんか。」

これらの構文の分析の仕方には、次の 2 通りが考えられよう。

(8) a. INTER-NEG [InfAbs V]

b. [INTER-NEG InfAbs] V

朗唱記号から判断すると、(5) と (6) は [分離]-[接続] の記号が付されていて a のように見える一方で、(7) は [接続]-[接続] の記号が付されていて a なのかどうか判断できない。とはいえ、3 例中 2 例が a を支持しているとだけ述べておきたい。

また、疑問詞 *hă-* と否定詞 *lō(')* が連続していない例が見られる。

(9) *hă-yādō^a* [10] *lō(')* [19] *nēda'* (エレミヤ書 13:12)
 INTER-know(InfAbs) NEG we know
 「私たちは知りぬいていないだろうか」

(9) のような語順の文はここにしか現れず、上述の否定疑問の疑問と否定の要素が分離されたと考えられる一方で、2.1 で見た [不定詞絶対形+

否定詞＋定動詞]に疑問詞が加わったと見ることもできる。Joüon and Muraoka (2006:393/§123f) では修辞疑問の表現として扱い、“do we not by chance know?” と訳している。朗唱記号は、2.1 の例と同じく [分離]-[接続] が現れており、不定詞絶対形が外置されているように見える。

2.2.2 「不規則な 3 例」

否定詞が不定詞絶対形の前に現れる残りの 3 例については、“the three irregular cases in which the negative is not inserted between the inf. and the finite form” (Muraoka 1985:87n16) のように「不規則な」例として扱われているが、これらの用例についても一定の説明ができるのではないと思われる。

- (10) 'epes [7] kî [17] lô(') [19] hašmêd [21] 'ašmîd (アモス書 9:8)
 howbeit NEG annihilate(InfAbs) I annihilate
 「しかし、わたしは... 全く根絶やしにはしない。」

2.1 で見たように、否定詞が不定詞絶対形の後に現れる用例においては、wā-「そして」という後接的な等位接続詞で導かれることはあるが、kî のような従属接続詞で導かれる用例は見られない。(10) については、kî 「なぜなら」⁵ という従属接続詞に導かれた唯一の従文のために、不定詞絶対形が外置されずに否定詞の後に現れているのかもしれない⁶。

- (11) 'āh [4=7] lô(') [-] pādō(h) [13=19] yipde(h) 'iš (詩篇 49:8)
 brother NEG redeem(InfAbs) he redeem man
 「人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。」

同じく 2.1 で見たように、こうした構文の前に現れ得る要素としては、接続詞や不変化詞といった機能的形態素のみである。(11) は、機能的形態素ではなく語彙的形態素である名詞 'āh 「兄弟」が既に外置されているた

⁵ただしここでは 'epes kî 「を除けば、にもかかわらず」という成句で現れる。

⁶(10) の構文に関して、部分否定の可能性はないかという指摘があった(私信)。一見そのように見えるかもしれないが、後述の (12) では死の部分否定を考えるのは難しいだろう。

また、従属節ではしばしば無標な語順が現れるのでそちらをむしろ無標を考えられるのではないかという大変興味深い指摘もいただいた(私信)。本論文で扱ったケースにおいて、kî によって導かれる従属節が現れるのが 35 例中 1 例と少数なので (kî 自体は 4,470 回現れる)、今後の課題としたい。

めに、不定詞絶対形の外置が妨げられているのかもしれない。朗唱記号に関しては、'ahには強い切れを表す分離記号 [詩篇における 4 は他の書物における 7] が付されている。

(12) lō(') [-] mōt [8] tōmutūn (創世記 3:4)

NEG die(InfAbs) you die

「あなたがたは決して死にません。」

(12) は、否定詞を除くと (1) の創世記 2 章 17 節に現れる構文に似ているためか、その箇所が暗示されているという意見と (Gesenius, Kautzsch and Cowley 1910:344/§113v) そうではないという意見 (Jotūn and Muraoka 2006:396/§123 o) が見られる。動詞 *mwt* 「死ぬ」による同語反復的不定詞絶対形+定動詞という構文はいくらかの変異形を伴うものの約 50 例現れており、一種の成句として捉えられて否定詞はその句の前にしか現れることができないのかもしれない。Goldenberg はこの場合も外置と捉えているようで、“(it is) not dying (that) you will die” および “what will come upon you will not be death, but ...” という訳を試みている (Goldenberg 1971:68/§30)。

朗唱記号の点からは興味深いことがわかる。すなわち、否定詞 *lō(')* と不定詞絶対形 *mōt* はマクケーフで連結されて 1 単位とみなされ、不定詞絶対形だけに分離記号 [8] が付されている。もしかしたら (8b) のように定動詞は別の単位で、不定詞絶対形が否定詞を伴って外置されていると考えられるかもしれない。

以上のように否定詞が先行する 6 例は、一種の成句的な句や節が現れていたり、あるいは例外として説明できると思われる。

3 おわりに

本稿では、定動詞に同語反復的不定詞絶対形が先行する構文に否定詞がどのように現れるかを考察した。すなわち、35 例のうち 29 例において否定詞が同語反復的不定詞絶対形の後に現れて [同語反復的不定詞絶対形+否定詞+定動詞] という語順を取り、6 例において否定詞は先行して [否定詞+同語反復的不定詞絶対形+定動詞] という語順を取る。従来から前者

が「通常」で後者が「例外」と言われてきた。

本稿では「通常」と言われてきた前者において、一部の研究者から同語反復的不定詞絶対形が外置されている要素ではないかということ、ヘブライ語本文に付されている朗唱記号の点からも支持されるのではないかと論じた。また、「例外」と呼ばれる後者について、どういう点において例外であるか説明されていなかったかについて、一定の説明ができることを示した。

【参照文献】

- Davidson, A.B. and J.C.L. Gibson (1994) *Davidson's introductory Hebrew grammar: syntax*. 4th ed. Edinburgh: T & T Clark.
- Gesenius, W., E. Kautzsch and A.E. Cowley (1910) *Gesenius' Hebrew grammar as edited and enlarged by E. Kautzsch*. 2nd English ed., rev. in accordance with the 28th German ed. (1909). Oxford: Clarendon Press.
- Goldenberg, G. (1971) 'Tautological infinitive'. *Israel Oriental Studies* 1: 36-85.
- Joüon, P. and T. Muraoka (2006) *A grammar of biblical Hebrew*. Subsidia Biblica 27. Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblio.
- Meyer, R. (1992) *Hebräische Grammatik*. De Gruyter Studienbuch 56. Berlin, New York: W. de Gruyter.
- Muraoka, T. (1985) *Emphatic words and structures in biblical Hebrew*. Jerusalem: Magnes Press, Hebrew University / Leiden: E.J. Brill.
- Solá-Solé, J.M. (1961) *L'infinitif sémitique: contribution à l'étude des formes et des fonctions des noms d'action et des infinitifs sémitiques*. Bibliothèque de l'École des hautes études; Sciences historiques et philologiques fasc. 315. Paris: H. Champion.
- 竹内茂夫(2007)「前1千年紀前半の北西セム諸語における不定詞絶対形の同語反復的用法」『一般言語学論叢』10: 79-91.
- Waltke, B. K. and M. O'Connor (1990) *An introduction to biblical Hebrew syntax*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.

Williams, R. J. (2007) *Williams' Hebrew Syntax*. Third edition. Revised and expanded by J. C. Beckman. Toronto: University of Toronto Press.

【2.1 で論じた以外の、同語反復的不定詞絶対形+否定詞+定動詞の用例】

これらの例を朗唱記号の番号を付して挙げるが、朗唱記号およびマッケーフ（連結符）の付き方は次のパターンに分けることができる⁷。

1. 不定詞絶対形-[分離]-否定詞-[接続]-定動詞:(16)(17)(18)(19)(20)(22)(24)(29)(30)(31)(32)(33)(35)(36)
2. 不定詞絶対形-[分離]-否定詞-[マッケーフ]-定動詞:(23)(27)(28)(34)
3. 不定詞絶対形-[接続]-否定詞-[マッケーフ]-定動詞:(14)(15)(21)(25)(26)(37)

1,2 においては、不定詞絶対形に分離記号が付いており、朗唱記号の点からはその他の部分とは別の単位と見なされている。

3 は不定詞絶対形に接続記号が付いているけれども、否定詞と定動詞はマッケーフでつながれているので、語アクセントは1つであって1単位と見なすことができ、接続記号によるつながりよりも強いまとまりである。3 の例においても朗唱記号の点から不定詞絶対形はその他の部分とは別の単位と見なされている。

また、邦訳として新改訳聖書第3版を挙げる他に、この構文での不定詞絶対形を外置された要素と考える Goldenberg (1971:66) に挙げられているいくつかの訳も参考までに付す。

- (13) wə-haṣṣēl [21] lō(ʾ) [-] hiṣṣaltā 「それなのにあなたは、あなたの民を少しも救い出そうとはなさいません。」(出エジプト記 5:23)

⁷不定詞の前に不変化詞 *raq* または *gam* が現れて、続く不定詞とマッケーフが付いて連される例 (19)(20)(26) の他、1例のみマッケーフが付かない例 (15) があるけれども、今回議論に影響はないと思われる。

- (14) raq [12] harḥēq [21] lō(ʻ) [-] tarḥîq 「ただ、決して遠くへ行ってはならない。」 “[...] but far away — you shall not go”, lit. “only (as to) going far away, you shall not go far away” (Goldenberg) (出エジプト記 8:24)
- (15) wə-naqqē(h) [10] lō(ʻ) [19] yənaqqê(h) 「罰すべき者は必ず罰して報いる者。」 (出エジプト記 34:7 = 民数記 14:18)
- (16) wə-ʾākōl [8] lō(ʻ) [21] tō(ʻ)kəlu-hû 「しかし、決してそれを食べてはならない。」 (レビ記 7:24)
- (17) wə-hopdē(h) [10] lō(ʻ) [19] nipdātā(h) 「まだ全然贖われておらず」 (レビ記 19:20)
- (18) gam [-] qōb [8] lō(ʻ) [19] tiqqōben-nû 「彼らをのろうことも (しないでください)」 “both cursing — you shall not curse them” (Goldenberg) (民数記 23:25a)
- (19) gam [-] bārēk [8] lō(ʻ) [21] təbārāken-nû 「祝福することもしないでください。」 “and blessing — you shall not bless them” (Goldenberg) (民数記 23:25b)
- (20) û-mākōr [21] lō(ʻ) [-] timkəren-nā(h) 「決して金で売ってはならない。」 “[...] and selling — you shall not sell her for money.” (Goldenberg) (申命記 21:14)
- (21) wə-hôreš [8] lō(ʻ) [21] hōrîš-ô 「彼らを追い払ってしまうことはなかった。」 “[...] but dispossessing — they did not disposses them.” (Goldenberg) (ヨシュア記 17:13 = 士師記 1:28)
- (22) wə-hāmēt [8] ʾal [-] təmîtu-hû 「決してその子を殺さないでください。」 (I 列王記 3:26)
- (23) wə-hāmēt [8] lō(ʻ) [19] təmîtu-hû 「決してその子を殺してはならない。」 (I 列王記 3:27)

- (24) bākô [19] lō(') [-] tibke(h) 「もうあなたは泣くことはない。」 (イザヤ書 30:19)
- (25) gam [-] bôš [19] lō(') [-] yēbôšû 「彼らは少しも恥じず、」 (エレミヤ書 6:15 = 8:12)
- (26) wə-hôšēa^a [12] lō(') [-] yôšî'û 「彼らを決して救うことはできない。」
“[...] but saving — they will not save”(Goldenberg) (エレミヤ書 11:12)
- (27) wə-hô'êl [12] lō(') [-] yô'îlû 「彼らはこの民にとって、何の役にも立ち
はしない。」 (エレミヤ書 23:32)
- (28) wə-naqqē(h) [8] lō(') [21] 'ānaqqek-kā 「あなたを罰せずにおくことは
決してないが。」 (エレミヤ書 30:11 = 46:28)
- (29) wə-homlē^{ah} [10] lō(') [19] humlahat 「塩でこする者もなく」 “and (as to)
being salted — you were not salted” (Goldenberg) (エゼキエル書 16:4a)
- (30) wə-hohtēl [8] lō(') [21] huttālt 「布で包んでくれる者もいなかった。」
“and (as to) being swaddled — you were not swaddled” (Goldenberg) (エ
ゼキエル書 16:4b)
- (31) hāyô [8] lō(') [19] tihyê(h) 「(それは) 決して実現しない」 (エゼキエ
ル書 20:32)
- (32) wə-lākôd [8] lō(') [21] yilkôd 「(鳥網は、) 何も捕らえないのに、」 (ア
モス書 3:5)
- (33) bākô [8] 'al [-] tibkû 「激しく泣きわめくな。」 (ミカ書 1:10)
- (34) naqqē(h) [8] lō(') [19] yənaqqe(h) 「主は決して罰せずにおくことはし
ない方。」 (ナホム書 1:3)
- (35) wə-sôk [19] lō(') [-] sākî 「(私は) また身に油も塗らなかった。」 (ダ
ニエル書 10:3)

The tautological infinitive absolute before the finite verb with the negative particle in biblical Hebrew

Shigeo TAKEUCHI

The aim of this article is to reexamine the syntactic status of the tautological (or paronomastic) infinitive absolute before the finite verb when the negative particle occurs in biblical Hebrew. Two different orders of these elements occur in the Hebrew Bible. They can be summarized as follows:

1. infinitive absolute + negative + finite verb (e.g., Judges 15:13): 29 cases,
2. negative + infinitive absolute + finite verb (e.g., Genesis 3:4): 6 cases.

The former has been called the “regular” or “typical” word order. Goldenberg (1971) considers the infinitive absolute before the negative as extraposed. This could be supported also by the disjunctive cantillation mark on the infinitive absolute. On the other hand, the latter six cases have been considered to be “exceptions” and seem to remain unexplained. However, they could be explained in terms of certain syntactical environments, e.g., such as the negative question.

Faculty of Cultural Studies

Kyoto Sangyo University

Motoyama, Kamigamo, Kyoto 603-8555, Japan

E-mail: atake@cc.kyoto-su.ac.jp